

温古知新③ 菜根譚 4 1

笑顔礼讃西東

ぎんなん句会 (東京都・港区) 2 3

真壁伍郎 (新潟県・新潟市) 4

小岩ミツイ (新潟県・魚沼市) 5

投稿作品 6 9

心に残った作品 9 10

お客様の「リレーエッセイ」黒川道彦 11

詠み人スクランブル(好きな雑誌は何ですか?) 12 13

新潟ぶらり / 岩室温泉 14

ニュースあれこれ 15

詠み人の「リレーエッセイ」歌人目黒哲朗 16

2 February Vol. 78

* 「喜怒哀楽」は、文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し(株)ミューズ・コーポレーション 喜怒哀楽書房が隔月発行している情報誌です。

喜怒哀楽

詠み人応援マガジン

詩歌俳柳壇 ニュース



前回は第十項まで、人としてのあり方の指針をご紹介しました。今回は、十一項からです。

藜口莧腸は、水清玉潔多し。袞衣玉食は、婢膝奴顔に甘んず。蓋し、志は澹泊をもって明らか、而して節は肥甘より喪う。

(素朴な食生活で生きている者は、透きとおるように清潔な者が多く、美食豊満な生活を送る者は、下衆な根性で生きている。思うに、志は淡泊な生活で磨かれ、飽食な生活で失う。) シンプルに生きること、正しい生き方ができる、ということでしょうか？

面前の田地は、放ちえて寛きを要し、人をして不平の歎なからしむ。身後の恵沢は、流しえて久しきを要し、人をして不匱の思いあらしむ。(生きている間はのびのびと寛き不満なきように。死後は、後の者に恩恵が長く保たれ、不憫な思いをしないようにしたいものだ。)

経路窄き処は、一步を留めて人の行くに与え、滋味濃やかなるものは、三分を減じて人の嗜むに譲る。これはこれ、世を渉る一の極楽法なり。(狭い道では他人に一步を譲り、美味しい物は三分を他人に分け与えるのが、世の中を楽しく生きて行く秘訣である。)

どちらも、たった今の自分だけでなく、残された

者、他者のことまでも考えることが大事である。私欲にとらわれないで生きたいものです。人と作りて甚の高遠の事業なきも、俗情を擺脫し得れば、便ち名流に入らん。学を為して甚の増益の功夫なきも、物累を減除し得れば、聖境を超えん。

(立派な人物となるためには大それた事業をしなくても、下衆な根性さえ捨てれば、ある程度になれる。学問で身を立てようとするには、物欲を減らして淡々と打ち込めば立派になる。)

友に交わるには須らく三分の俠気を帯ぶべし。人と作るには一点の素心を在するを要す。

(友人関係を続けるにはある程度相手に合わせる心を持たなければならぬ。立派な人間になるには、こころ一番の信念を持ち続けなければならない。)

事をなすには、周りに惑わされず、地道に活動する。時には友よりも信念を貫くことが必要なのかもしれません。

寵利は人の前に居ることなかれ、徳業は人の後に落つることなかれ。受享は分外に踰ゆることなかれ、修為は分中に減ずることなかれ。

(利益は他人に先じて手に入れようとしてはならず、慈善の行為は他人に遅れてはならない。そして、楽しみは求めすぎず、日々の修行を怠ってはならない。)

利益を求めず、率先して善い行いをする。これが良く生きるということ。

信念を持って、質素に他人のことを考えて生きる。これが必要なことですね。(古川久美子)

ぎんなん句会

連絡幹事 佐瀬広隆様

(東京都・港区)

連絡先/〒263-10001

千葉市稲毛区長沼原町942-1-2303

sase-f@gagate-plaza.or.jp

12月13日(土)、港区生涯学習センターで行われた「第62回ぎんなん句会」にお邪魔しました。

当日は真つ青の快晴。小学校を改装した元・教室の机には日が燦々と降り注ぎ、産地の違うみかんやら、奥さま手作りのクッキーなどたくさんのお菓子が置かれていく。

本日は初めて自由律俳句に対するとあつて、選句用紙を見た瞬間にドキリ。えつ短い、そしてこれは長い…。そう、自由律俳句とは五七五の定型や季語にとらわれず、伝えたい感情の自由な律動を一気に表現する韻文の詩型で、口語で作られることも多い。「咳をしても一人 尾崎放哉」や「分け入つても分け入つても青い山 種田山頭火」などにご存じのところ。今日は一人2句出句×21人、合計42句からの8句選。特選を2点とカウントし、その合計点の高い方から互評します。

◎高得点句より

生きていて墨をする

安門 優

この句は特選が4人も！／作者がわかるが、彼女らしく端的でいい／墨の匂いが立ちあがってくるような句。短くてこれだけのことをいうとは、やはり特選／「墨をする」を別な言葉に代



▲連絡幹事の佐瀬さん(左) 今は亡きお父様も俳人

えてもいい気がする／つい先日、生き死にから生還した身としては、生きていく実感は普通の作業の中にあると感じる。墨をするのは、ただ手が動いているようだが、瞑想の時間。単純化された作業の中に、生きるという実感が象徴的にうまく捉えられている／墨以外のものをもつてくるともつと動きがあるから、少しにごっちゃやう／みんないいことを言ったので、言わないように言ってきますと(笑)、絵を描く人は生きていて絵を描くし、編み物をする人は生きていて編み物をする、上句に続く言葉が複数考えられ、これでは足りない感じがする。墨をすることが自分の生きていく証しであるとするならば、何か近いものがほしい。これでは句として未整理。だからとらなかつた／生きていて何でもするが、墨だから特別にこれはいいのだと思ふ。墨をするときの硯の音や、時と自分が対峙するときの硯の短いフレーズの中に今を生きる作者の切羽詰まった様々な想いが入っていると

想像できる、それは墨だから／私は生きていて何でもできるという感謝の気持ちを感じた／年賀状の時期、生きていないと宛名だつて書けない、それを連想していただいた。ひとりであたり分の秋を歩く

南家歌也子

亡くなった方を思いながら歩いているのでしようか、ふたり分が寂しい／約束をしていたのだと思う。切符も旅館も二人分とつて／そこまで深くはないでしょう。二人分の切符を買ったなんていうより私はね、秋になると「これが紫式部の実なのよ」と教えてくれた、深大寺からの道を歩いたあの女と、あの時の気持ちを思い出す／斎藤さんのロマンスだね(笑)／作者は大切な人を亡くし、その思いが句になつたのではと思う。柿の色がなければただの淋しい家

内藤邦生

田舎の廃屋みたいな、周りはモントーンのなかで柿の実だけが黄色でポーンと。それがなければ何もないといいことが、うまく捉えられている／「ただの淋しい家」が主観的だから「無色の家」等にしたら現代的になるのでは？／「ただの」が、突っ放した感じがしてとらなかつた。

それぞれのいろをもちおちば土にかえる
斎藤 実

土だけが漢字であとはひらがな、どういうことなのかなと／「土」を強調したい？ 落葉とは言っているが、人もそれぞれの色を持って土に還っていく、そのことが重なつて感じられた／「それぞれのいろ」というフレーズが気に入つた／人生という読み方はしなかつた。



▲自由に何でもいいあえるってすばらしい！

そちらが正解かもしれないが、黄色や赤色の紅葉がすつと消えて土に還っていく、単純にただその自然の美しさの方をとつた／私も賛成。最近、掃除させられるようになって(笑)、いろいろな落葉がだんだんくずれて土になる。その光景をあまり深刻にとらえずに軽くとつた／深刻にもネガティブにも考えていない。それぞれのいろ、が肯定的に感じるし、いろいろな生き方をしていくというのは、否定的ではない／作者は：斎藤さんなの？ 女の人のことが書いてないじゃない(笑)。

作者／昨年病氣して、もう先が見えてるな！と思ひながら今年の落葉を見た。あんなにきれいだつた落葉が2、3日も経つともう土に近い色になつている。みんな能書きを垂れていろいろ言っているが、結局はこれだよな！という思いがあつて。

キリンの首の高さに秋が来ている

平岡久美子

木は高い方から色づく。季節はいきなり来ないということ。キリンでやられたと思つた／ゾウでもラクダでもだめ、キリンの黄色がまさにぴったり、うまい／高さを表現するものは多々あれど、キリンをもつてきたところが発

笑顔礼讃西東



て整理されるのかを考えると、早く自分で捨てたい。年末は、特に切実に思う／年末になると、喪中のハガキが届く。亡くなるとうやうや連絡され、整理されていくのかなーと

見／この句はどなた...？ 黙っていると
思えば、さすが平岡さん！
手酌だ思ひ出は封印 萱沼良行
手酌で飲んでいるときは、いろんな
思い出が浮かび上がってくる。ムードに
ひたつていい酒が飲めるときもあれば、
なんで俺がこんなことを...という、心の
葛藤も起こりやすい。この句は、つま
らないことは封印して、今日の酒を飲
もう！という明るい気持ちがいい。本
当は封印なんて言葉は使いたくないけ
ど／同感、封印がなければねえ／普
通は嫌いなんだけど今の私の心がね...
そういう点で選句は難しい。自分の状
況に即していやに同調したり、あとか
ら見ると、何でこんな句をとったんだ
と思うときもある。

／おもしろみがなくなっていたか
た／今回の手術で、家に帰ってこれ
ない可能性もあった。特に書簡類は
見られたくないものが多く、かなり整理
した。これが突然のことだったら、本
当に困るだろうと思つた。そういう意
味で、年末の整理はできすぎ。
そういうえば毎日ありがとうと言われて
いた
南家歌也子
うちも老老介護。夫は言っているつも
りかもしれないが、忙しくて感謝され
ているとは思えない。一段落したときに
そういえば感謝されていたな、と思うの
かも。ちよつと「ありがとう」と言つて
くれればいいのにね！／これは過去形の
ところがポイント。ふとしたきっかけで
思い出したということ／毎日、気にもせ
ず、当たり前のように受け取っていたが、
亡くなってみて「そういえば言っていた
な」と思い出したのだろうね。いなく
なつてからわかる、わかつてもらえる／
ああ、やはり南家さんの句。
ひとにぎりの土に咲いている **平間昌水**
そういうことなのだと思うが、な
かなかこういう視点と角度で捉えるこ
とがなかった／具体的には小さな花な
のでしようが、限られた範囲の中で懸
念に自分の花を咲かせている人間に置
き換えて、深い感銘を受けた／すみつ
こだが、小さい花を咲かせている、そ
れを人とクロスさせて詠んでいる。
いちようはらはら風のむかし **佐瀬広隆**
意味がよくわからず説明できないが
「風のむかし」など、どの言葉もみんな
よくていただいた。あんまり考えると
くたびれちゃうのね(笑)／この「風の
むかし」は、風が昔話を語っている、そ

こにいちようはらはらと散つて...。い
いですね／わかるよ、どうぶつつかると
すごくいい句。「風のむかし」も確かに
いいフレーズだが、「いいだろう？」と、に
やにやしている作者がいそうで、ひつか
からないぞと裏をよんだ(笑)／でも、
さらつと調子のいい句で、お上手。
幸せ鍋にして冬のほほ笑み
小林真理子
「幸せ鍋」なんてどんな鍋だろう。い
いですね／あるんですか？(笑)／「幸
せ鍋はじめました」なんてあつたらいいね。
コンビとか売りましたらいいのに／冬
といえは鍋。先ほどの手酌と相対して、
何人かで囲むのが鍋。この句は冬が
「私が出てきたのでしょ、みんなで鍋
を囲んで幸せを感じられて」という句
で、冬が喜んでる。幸せにしてくれ
たのは冬、その先に鍋がある／さて、
今晚は幸せ鍋にするか。



▲カタルシス = 精神の浄化 語った後の皆さまはよりスッキリと！



▲心臓の手術を終え復帰された吉多さんもビール片手に

◎他高得点句
ひとり旅の夕日を見送る 風見洋子
この花の名もう一度だけ教えて 吉多紀彦
人生二方通行ゆくり走る そねだゆ
窓ガラスの拭き跡いとしくて 堀 美子
★一人が口火を切ると、そこに重なる、
膨らませる、転回する、疑問を呈する、
異議を唱える、そして脱線もする。イ
メージとしては、四角い机の空間をエア
ホッケーのごとく、直球や緩球が自在
に飛び交う感じ。積み上げてきた確かな
人間関係があるから成せる業であり、
自由律俳句に対する探究心と真摯な
情熱がなければ成立し得ない関係性で
あるう。辞書によれば「自由」の反対
は「束縛」かもしれないが、「自由」の
反対は「責任」なのでは？ と思えるよ
うな、自己を律し、他者を尊重した、
安心できる居心地のいい会なのでした。
(木戸敦子)

にいがたグリムの会 代表 真壁伍郎様 (新潟県・新潟市) 『SEVEN STORIES HIGH』

昨年9月、これだけは読んでおきたい！という子どものための良書を紹介した、今や幻の文獻2つを「SEVEN STORIES HIGH」として翻訳・出版された「にいがたグリムの会」代表の真壁伍郎さんにお話をうかがいました。

ここ「野の花文庫」は、昭和46年にご自宅の一室を解放して開いた家庭文庫で、当初娘さんのために集めた児童書300冊が今では1000冊以上となり、部屋の周囲をぐるりと巡っている。

Q.すごい数の本ですね！

これは児童書だが、自分の本は既に1000冊くらい大学等に寄贈している。8人兄弟の5番目で、幼少期は野山を駆け回るような生活のなか、小学校教師だった父は私たち兄弟にいい本を与えてくれ、生徒にも読んで聞かせていたようだ。母は病弱で高等小学校しか出ていなかったが、様々な物語を聞いて育ったようで、私たちにも寝る



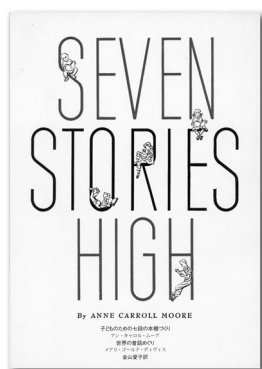
前やコタツでいろいろな語を聞かせてくれた。本が好きで、特に源氏物語は93歳で亡くなる2、3カ月前まで原文で読んでいた。両親とも本が好きだったが、父は調べるのが好きだったし、母は自分の心の世界を大切にしていた気がする。

Q.本が身近な存在だったのですね

よく兄弟で回し読みをしたりしてね。同じ本でも、みんな感じ入るところが違って、だから本は楽しいし、ひとりおりにやらないところがいい。今も「聖書の会」や児童文学の勉強会、「にいがたグリムの会」など、3つほど読書会を主宰しているが、いずれも継続しており、一番長い会は60年近く続いている。大学ではドイツ思想史を学び、卒論はルター。ダンテの神曲、ゲーテのファウスト、聖書といった主に古典を題材に勉強しているが、知れば知るほど興味は広がり、尽きることがない。ラテン



▲「道楽です」と笑うが、世界でここにしかないという絶版や初版本などの逸品が！



▲児童書に携わる人 必携のバイブル『SEVEN STORIES HIGH』

語でノン・ムルタ、セド・ムルトウム＝not many but much＝「多くではなく深く」という言葉がある。今の情報化社会は、物知りばかりが多くなり、深く考えない人が増えている。

じっくりいいものと向き合う大切さ、読書会も「野の花文庫」も「ブッククラブ」(幼少期からの良書の配本 真壁さんは代表)もそれが根底にある。

Q.そつじつ「度」の『SEVEN STORIES HIGH』ですね

子ども時代は短い。だからこそ、基本的な感性が養われるその期間に、品格のある本物の本と出会ってほしい。「多くではなく深く」「たくさん読んだり、いい本を」です。たくさん読んでほしいという、親の欲もあるでしょうが、子どもたちに本当にいいものを伝えておかないと、言葉がどんどんやせていく。よい本、よいお話とはどういうものか、そのことに気づいた全国の図書館員や親御さんたちから、いまこの本が見直され、多くの引き合いがきています。

Q.これからは？

もうじき向こういくのだからね。今さらうまいもの食べたって仕方ないし、これからの人、未来のために、心の栄養、肥やしになることをしていきたい。

それしかないと思っている。あと、19歳の時に出会って以来、60年間一度も喧嘩したことがない妻と楽しく暮らしたい。頭にくることがあるかつて？相手がマイナスだと思ったら、自分もマイナスだと思えばいい。マイナス×マイナス＝プラス。自分のことを考えればいい。自分もマイナスだらけ(笑)。これからも、そんなふう生きていきたい。

★新潟大学名誉教授であり、元新潟のちの電話の理事長でもある真壁さんだが、生まれは同じ町、沼垂(ぬつた)というところで、親近感を感じる。高尚で、穏やかで、でも正直で、飾らなくて、随所に沼垂弁が出て。「たくさんではなく、深く」「未来のために生きる」「夫婦で喧嘩したことはない」など、一部信じがたく、頭を垂れて(うなだれて!?)、聞くべきありがたいお言葉の数々！真壁さんありがとうございます。私も、少しでも見習ってそんなふう生きていきたいです。沼垂の誇りです。(木戸敦子)



▲お互いが欠くべからざる存在のまさにパートナー

小岩ミツイ様

(新潟県魚沼市)

『思い出はそよ風にのって』

去る11月10日、故郷の思い出を『思い出はそよ風にのって』としてまとめた小岩ミツイさんを、旧守門村、現在は魚沼市にあるご自宅にお尋ねしました。

玄関周辺には、積み上げられたおびただしい数の薪。これから雪に閉ざされるであろう豪雪地帯の長い冬を思う。「やわつかすぎたみてだけど、食べてくんねえかえ」と、何ともおもしろいようなあめ色の煮しめとともに、出迎えてくださる。

Q.この本を出すきっかけは？

たまたま台所のラジオから「やりたいうことを暇ができたらか、歳をとってからやろう、なんて思っている、病気になるったり動けなくなったりすることもある。さあ今日から始めましょう！」というフレーズが聞こえてきた。生まれ代ところは、汽車に乗るまでに何時間も歩き、渡し船に乗らなければいけないような山の中、中魚沼郡真人村。当時あった60軒の家はバラバラになり、



▲一緒においしくいただきました！

ずとさみしく思っていた。このラジオをきっかけに、幼い頃の思い出をこつこつと広告の裏に書き始めた。

Q.書くことは好きだったのですか？

やつのこと中学を卒業したくらいだから、書く基礎がない。自分なりの法則で書いてはいたが、正しい文章や文法がわからないから、常にこれだいいの？と疑心暗鬼だった。本屋さんで「自分で納得していない文章は人を納得させることはできない」との一文に出会い、そうだなーと思って、昔の遊びや自分が体験したことを、方言のままに書き綴っていた。

そんなある日、退職した先生がこの近くで始めた「大塚山荘」(子どもの図書館)の、通称絵本のおぼさんが、教育実習のとき私の卒業した「北山小学校」にいたことがわかり、書いたものを手直ししてもらおうと持参した。そうしたら「このまま、大塚山荘便り」という通信に出したらどう？」という話になり、その第一回目として「北山が見えるよ」という文章が掲載された。そして、その終わりには「一年間連載する予定です」と！以来、平成19年12月、23年7月までの21話を書いた。

Q.それが、この度の本に？

まさか、こんなことになるとは夢にも思わなかったが、息子(新潟市老舗ホテル・シエフ)が「せっかくだから、まとめたら？」と、言ってくれたことが背中を押した。あの言葉がなければ、「お金がかかるからいわ」で終わっていた。

Q.すみません、お金を使わせて(笑)

でも、大変な思いもしたけど、完成してただただうれしくて言葉にならない

かった。本の表紙の風景は「この向こうに北山があるんだ！」と、出稼ぎにいった人も戦争にいった人も、みんな駆け出したくなる場所。本を手にした同級生や同じ集落だった人から「懐かしくて涙が出た」「よく昔のことを書いてくれた」と、感激して、電話や手紙が絶えなかった。完成した本一冊は大切なので茶箱に入れ、校正の時に送られてきた本を、毎日こつこつやっつけてぎゅーっと抱きしめて寝ているの。だからボロボロに。



▲故郷につながるすべてのものが愛おしく抱きしめたい

Q.大切な故郷ですな

当時は、食べるものもなくいつもお腹はペコペコ。でもね、だからこそ何でもおいしかった。寝るのも綿の代わりに藁を入れたくず蒲団。兄弟でそんなところに寝て、貧しい生活だったかもしれないが、私には宝物。峠の向こうが便利なこととはわからなかったし、みんながこういう生活をしていると思っていたから別段、苦労だとも思わなかった。今では、故郷の小さい時の思い出のすべてと、道ばたの石ころの一つひとつ、草の一本一本までもが、懐かしさと愛おしさで抱きしめたくなる。

Q.これからは？

本の反響も一段落し、これからの楽しみといってもねえ。孫の成長と、書き忘れたことを少しずつ書いていこうか

なあと思ってる。でも、締切がないとなかなかね(笑)。あとは、なるたけけんかしないようにしていこね、とーちゃん！

★帰り際「会社の人みんなに分けてくれね」と、大根、葱、白菜：山のような野菜を持たせてくれる。中学を卒業後、出稼ぎ先の静岡のみかん農家での会い、一緒になったという旦那さんと二人、何メートルも積もった雪の中、今ごろ何をしているのだろう。スキー場の調理員、小学校の給食調理員に付添婦と、農業を兼業しながら3人の子どもを育て上げたご苦労など、みじんも見せずにからから、ころころと笑う小岩さん。あともう少し。暖かく、強く、深い、故郷の春も待っている。(木戸敦子)



▲「友だち夫婦みたいだから喧嘩するのかな」と小岩さん



▲毎日抱きしめている本はボロボロに(右)。左は完成した本

投稿作品

※次回しめきり 2015年3月16日(月)まで
たくさんのご投稿お待ちしております!
※作品は原稿どおりに掲載しております。

俳句

- 1 鍋奉行灰汁代官も輪の中に
吉里ひとみ(東京都)
- 2 小春日や鐘二つ鳴るのど自慢
長谷川正(東京都)
- 3 福笑ひかりかり囃みし金平糖
清水勝子(神奈川県)
- 4 天竜の川辺に残る枯芦や
須澤重雄(長野県)
- 5 風花のにはかに募る帰心かな
川口 襄(埼玉県)
- 6 首かしげ話聴く犬春隣
大谷 茂(埼玉県)
- 7 遠き日の父の一喝丸火鉢
一瀬正子(埼玉県)
- 8 追いかけて文太も逝きし時雨かな
井上静夫(栃木県)
- 9 年新た十年日記道半ば
近藤薫也(千葉県)
- 10 末枯や記紀の世も斯く大落暉
澤 雅子(大阪府)
- 11 希ひ願ふ初夢八たび七十路
有坂馨園(福島県)
- 12 昼酒の許す勤労感謝の日
山崎吉晴(群馬県)
- 13 寒月や照らすやこのおちんちん
松田重信(埼玉県)
- 14 兄妹の絆を結ぶ年忘れ
関原幸子(東京都)
- 15 歯車のぴつたり合つて農納む
大場卯月(長野県)
- 16 富士川の流れば冷瀧冬温し
渡邊碧海(静岡県)
- 17 妻の縫う一針毎の夜長かな
関本 守(新潟県)
- 18 雪下し黒い使いが戸を叩く
角谷不二(新潟県)
- 19 八十路今孫にせがまれ鶴を折る
松涛千鶴子(東京都)
- 20 温泉を抱きあたり一面山眠る
天野輝子(東京都)
- 21 減反はせぬとの覚悟冬田打つ
湯浅芳郎(岡山県)
- 22 冬すみれ褒めて通れば小躍りす
炭崎 博(滋賀県)
- 23 リハビリの身にやさしかりおでん食む
竹本美美子(新潟県)
- 24 訪ね来しぼつくり寺や冬すみれ
勝田久美(大阪府)
- 25 年用意猫の首輪の新しく
山田幸代(兵庫県)
- 26 冬の雲君もスローか肩組んで
居原田連星(大阪府)
- 27 晩年の一人は自由初日の出
井原毬子(東京都)
- 28 寒稽古竹刀担ぎし美少年
檜山とり子(東京都)
- 29 枯野原どこまでも延ぶ己が影
三ツ木宗一(東京都)
- 30 失明の猫をこたつに入れてやる
松尾らん(東京都)
- 31 杉の葉の透くるほどなる冬月夜
小澤川梨(静岡県)
- 32 空き缶のかびかび粘土寒早
石井美智子(埼玉県)
- 33 雨の日は雨の用あり十二月
堅田秀子(東京都)
- 34 十二月八日驕る国も久しからず
福岡 悟(東京都)
- 35 冬の蜘蛛命の限り糸を引く
山本勝美(滋賀県)
- 36 根白草白湯をくぐらす妻若し
佐野 繁(静岡県)
- 37 法螺貝や出羽三山の雪景色
福田和子(東京都)
- 38 通らせてもらう境内初紅葉
中澤寿美(神奈川県)
- 39 初晴や八十路半ばに幸あれと
大橋恒次(新潟県)
- 40 お降りの静かに止みて山の息
重原 昇(新潟県)
- 41 せり上り収穫を待つ大根畑
古川正栄(千葉県)
- 42 冬の雷いくさなきこととしなへ
小島岳青(新潟県)
- 43 東西の学を究むや漱石忌
津田忠彦(岡山県)
- 44 宙近く祖先見下ろす秋彼岸
千代田俳徒(東京都)
- 45 葉牡丹の宇宙ステーションネズミ乗る
白戸麻奈(東京都)
- 46 一献の盃ありて初日かな
阿部徳夫(宮城県)
- 47 老いたればこそのお洒落や初鏡
阿部澄江(宮城県)
- 48 先頭の指導身につく雁の棹
阿部幸子(宮城県)
- 49 山の枝白しろしろの雪ばかり
杉本敬治(愛知県)
- 50 初春の神鶏ときをほしいます
佐野和彦(静岡県)
- 51 通夜帰り咽びて仰ぐ冬満月
清まさじ(静岡県)
- 52 冠雪の富士に総立ちツアー客
杉原明子(静岡県)
- 53 葉牡丹も添えて仰ぐ新曙光
西條公雄(埼玉県)
- 54 青色LEDに顔照らされて初詣
田野倉訓郎(東京都)
- 55 アルバムの旅を辿りて冬ごもり
中嶋清子(佐賀県)
- 56 二十八の亡母に留まる曼珠沙華
浦橋渴雪(兵庫県)
- 57 冬の日や強き握手の友の逝く
黒岩正子(埼玉県)
- 58 枯駅のホーム切株ふえにけり
安部 哲(新潟県)
- 59 八十は御の字ばかりおらが春
阿部 至(埼玉県)
- 60 朽ち舟の二隻残りし石路の花
小泉和明(茨城県)
- 61 天変地異被災地照らせ冬満月
堀木和子(大阪府)
- 62 姿見の影に棘あり冬薔薇
緑川禎男(埼玉県)
- 63 遠き日の祖母の行火や子守歌
三津木俊幸(千葉県)
- 64 たくましく冬芽のありてシカ出でる
杉村美保子(岩手県)
- 65 好きなもの雑貨雑文冬の花
日下温水(東京都)
- 66 一年の世相写して年果つる
菅原茂子(宮城県)
- 67 実むらさき青き瞳は旅の人
堀井醉人(茨城県)
- 68 小雪舞い色あざやかに秋海棠
長谷部喜代子(大阪府)
- 69 獅子頭ぬげば青き眼高き鼻
小林七重(新潟県)

- 70 潰滅の土地鎮めんと手毬唄
今井勝子(新潟県)
- 71 ふところを命を抱いて山眠る
水落重式(新潟県)
- 72 遣水や音も光も冬はじめ
上村元義(神奈川県)
- 73 旅衣払へば落つる木の葉髪
高崎登喜子(東京都)
- 74 年賀状だけのつながり五十年
長峰正晴(千葉県)
- 75 地球儀の北半球に冬帽子
羽根田明(神奈川県)
- 76 菜園の蕎麦の粉なる晦日蕎麦
木村貞恵(静岡県)
- 77 おいらん草図鑑に咲いて名はかなし
能條憲夫(神奈川県)
- 78 聴覚の障害残るクリスマス
柳澤京子(宮城県)
- 79 まぼろしの汝が背に放る雪礫
梶 鴻風(北海道)
- 80 氷柱折れ折れても太る祈りかな
池田 岬(埼玉県)
- 81 日おもての朱もよし黄も冬紅葉
塚田寿子(埼玉県)
- 82 紙漉女寄せては返す波を追ふ
片山茂子(埼玉県)
- 83 寒空や隅田川辺のホームレス
鷺谷浅子(茨城県)
- 84 ふくら雀さへふるさとの顔を持つ
二瓶邦枝(埼玉県)
- 85 ハタハタは父母の顔して届きけり
井田由利子(宮城県)
- 86 冬麗や臍のごとくに雲一つ
松嶋光秋(東京都)
- 87 凸凹の故郷の山も冬に入る
鈴木蝶次(宮城県)
- 88 息災や朝のつばい寒の水
内河邦久(東京都)
- 89 絶筆となりし賀状や墨匂ふ
田中 昶(鳥取県)
- 90 まだまだと思ふ心や福寿草
青木ケン子(埼玉県)
- 91 老醜は見じと冬の面がまえ
渡邊 清(宮城県)
- 92 猫白く走り消えたる冬銀河
渡辺由美子(宮城県)
- 93 白梅や凜々しい気品深空あり
五味田幸夫(神奈川県)
- 94 着膨れて齢性別不明なる
平山千江(岩手県)
- 95 水仙の香にさそはれて庭に立つ
鈴木みえ(長野県)
- 96 銀色のすじ凍て死のなめくじり
有田裕子(北海道)
- 97 初夢や夢のまでは終らさず
大内泰子(東京都)
- 98 足跡に重ねて歩く雪の道
松前邦広(千葉県)
- 99 人の輪の心底嬉し年の暮
川嶋法子(東京都)
- 100 峠茶屋閉ぢて庭木の雪囲ひ
津布久信雄(東京都)
- 101 寒風を来て海上の遊歩道
環 順子(東京都)
- 102 ひつじ年夫婦揃ひや千代の春
神 一男(静岡県)
- 103 咆える風雪女姿や妻帰る
菅井文男(新潟県)
- 104 寒の水双手ですくう修業僧
大塚徳子(埼玉県)
- 105 狼よ捨身の仏焔を廃す
坂本正夫(千葉県)
- 106 ゆつたりと雲や師走のオフィス街
山田富朗(埼玉県)
- 107 天の地に囁くように時雨けり
吉村充治(埼玉県)
- 108 落葉散る巷の声を聞きながら
木村 舂(山形県)
- 109 虎落笛一人の鍋が踊り出す
岡村君枝(茨城県)
- 110 掃きためてこそぞと父の落葉焚
宮本幸子(埼玉県)
- 111 頼らるるうちが幸せ毛糸編む
田中美智子(埼玉県)
- 112 数え日や買物手順書きとめて
中田文子(大阪府)
- 113 除染逃れすみれ一輪咲きにけり
佐藤正子(福島県)
- 114 人界の修羅を煽りて虎落笛
西川孝子(奈良県)
- 115 輪飾りの小ぶりを掛けて路地住まい
服部八重子(東京都)
- 116 あらためて夫の顔みるお元日
山本直子(大阪府)
- 117 百枚の棚田の宴石路の花
井上氣海(広島県)
- 118 いくつもの悲喜を宝に古日記
石黒寒菜(新潟県)
- 119 遭難の友抱きしまま山眠る
古谷 力(東京都)
- 120 冬迎え静かな海に夕陽入る
中村和弘(愛知県)
- 121 ふくらと包む風呂敷小春かな
道給一恵(埼玉県)
- 122 平安京より江戸東京へ初日影
岩村 昇(神奈川県)
- 123 父と子のキャッチボールの冬日かな
浅野信廣(宮城県)
- 124 干大根かけて村中寡黙なり
岩崎政弘(岡山県)
- 125 下北に会津士魂の寒立馬
鈴木岑夫(千葉県)
- 126 相続税マスクの中で絶句する
北野耕兵(千葉県)
- 127 球根植う待つ楽しみ始まり
大阿久雅子(埼玉県)
- 128 三種でも揃えば嬉し七日粥
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 129 冬枯れに阿吽の呼吸ひびきあふ
小林春雪(新潟県)
- 130 日向ほこ水子地蔵のかざぐるま
浜田はるみ(埼玉県)
- 131 ひっそりと老の初春常のごと
藤井春三(埼玉県)
- 132 主刺され王国火蛾の乱舞せり
加用章勝(千葉県)
- 133 里山の樹々無口なり冬至の日
坪田勝秀(鹿児島県)
- 134 二度三度重ねなおして鏡餅
中村康浩(福岡県)
- 135 ふきよせと云う菓子もあり京の秋
中山日出子(大阪府)
- 136 冬至風呂柚子確りと握り締め
田野井一夫(栃木県)
- 137 輪になつて舞う紅葉に足を入れ
木下 精(大阪府)
- 138 縁日の日向を婆の暦売り
鈴木清子(埼玉県)
- 139 冬の田に諍のなく野鳥群れ
青木涼子(埼玉県)
- 140 バスを待つ百八円のマスクして
寺内 佶(埼玉県)
- 141 凍つ空やヘリコプターが吠えている
大野 喬(大阪府)
- 142 豊穣の時を謝すべし去年今年
長野光康(神奈川県)
- 143 呑みこみし山そのままに山眠る
倉田淑子(東京都)
- 144 乾かずにある妻の髪初雀
高杉杜詩花(北海道)
- 145 華やいで子役演ずる里芝居
早乙女文子(埼玉県)



- 146 丹沢の峰より谷に春浅し 齊藤安弘(神奈川県)
 147 病院の窓越しに見る月明かり 秀隆(兵庫県)
 148 実南天真紅一筋貫ぬけり 磯部 力(新潟県)
 149 神籤の凶に一年分の厄落し 星 一子(神奈川県)
 150 鳥居前一札してから初詣 宇田川正雄(埼玉県)
 151 手を引かれ願う事なき初詣 野村牟人(東京都)
 152 大晦日足を痛めてベッドの上 林 玉子(長野県)
 153 自然薯を育む笑みも買つて来し 小山羊子(新潟県)
 154 湯煙や冬の流れに従いぬ 岩田 信(神奈川県)
 155 餅つきのにぎはふ昭和夢の中 柴田恵美子(北海道)
 156 愛犬に引かれて今日も寒の道 高橋まさ子(宮城県)
 157 わが生の余命いくばく去年今年 中野勝子(鹿児島県)
 158 戦なき瑞穂の国や年新た 永井俊樹(兵庫県)
 159 大師までどの径ゆくも恵方かな 村田吉雄(東京都)
 160 大空に心と書いて書き初めに 河野静子(埼玉県)
 161 新海苔をあぶつて包むおにぎりの味 針生 清(千葉県)
 162 湯豆腐や生きるに倦みし酒五勺 増本和子(大阪府)
 163 露の薫加えて粥の出来上る 山崎鶴恵(鹿児島県)
 164 ごあいさつ上手にできてお年玉 石川郁子(埼玉県)

- 165 北からの破船着きしと虎落笛 中川義彦(新潟県)
 166 茶の花を夕べ利休の如く活け 増田公代(東京都)
 167 わだつみのこゑうねり来る開戦日 邑橋節夫(兵庫県)
 168 帳尻の合ひし人生冬うらら 大窪美代子(大阪府)
 169 冬草や紅濃き佐渡の石据える 駒場京子(神奈川県)
 170 新らしき年の窓あけ拍手を 浅海和代(東京都)
 171 孫等皆揃ふ元日背くらべ 金子範子(高知県)
 172 どこがどうといふのでもなく若き日 とすこしちがえる日々すこしゆく 佐々木都(長野県)
 173 よくわかりませんがおっとうろうそくの青い炎がゆれている闇の中 梅澤鳳舞(埼玉県)
 174 石けりの石はどこまで行つたやらふるさとの野にわれ老いて立つ 寒川靖子(香川県)
 175 うぐいす目白ひよ尾長美声がびちよう打つて庭の茂みを飛び交う 森 俊彦(神奈川県)
 176 席にきてしばらく帽子を被りいるこれも洒落にて宴もありあがる 土屋喜雄(山梨県)
 177 ふる里の詩歌訪ねるときめけり祈り新たに千島の還る日 早坂紘司(北海道)
 178 糠雨にふらふら飛んでる秋の蝶失せ物さがすわれの姿か 野木宗信(奈良県)

短歌

- 179 新年の春を迎えて九十年卒寿祝いて更に生きなむ 関子利明(兵庫県)
 180 いとほしみ給ひし人等皆きえてかの世見えそむ今日は清明 弘津敦子(山口県)
 181 恒例の義妹の宅の夕食会の蝗・泥鰌の味堪らなし 今井忠一(東京都)
 182 ひとりさへもの言わぬなりどんど焼き若き想い出空に秘そめり 合田浩子(茨城県)
 183 形よし色よし艶よし味もよし秋の便りの奈良の富有柿 石尾曠師朗(東京都)
 184 スポーツもノーベル賞も金つゞき嬉しくなりて何度も見たり 高須 孝(愛知県)
 185 ドカ雪と戦うブルをたのみ見る夕暮早く街あかり見ゆ 高橋登志子(新潟県)
 186 幾山坂越えて来たりし糟糠の妻の髪いろシルバーとなり 藤原昭三(滋賀県)
 187 イナバウアジャンプするたび難度あげ羽生結弦は日本の宝 佐伯セツ子(香川県)
 188 何ひとつ昨日と変わることなくも身の引き締る元旦の朝 山田楽山(埼玉県)
 189 ひとときは年金額を忘れおき歳末買物小さきハッピー 南喜美子(千葉県)
 190 骨折のリハビリに通う道すがら寄り添う夫の優しさ身にしむ 矢島多恵子(東京都)
 191 核すべて絶対悪とわれ思ふ広島・長崎・福島は惨 黒澤正行(福島県)
 192 豪雪の続く二月もこの日頃どこか春めく春よ早よ来い 坂元正憲(東京都)

- 193 今どこにいるのと聞けばケイタイに孫の声あり「こたよ」と言う 桑原謙一(群馬県)
 194 錆色の陸橋けさはぬれそぼち色とりどりの傘は動けり 北岡 晃(兵庫県)
 195 降りつづく無明の雪も受け容れて冬の喪章に扱あぶ丹椿 黍嶋金平(愛知県)
 196 消えるかと思ふドカ雪消えきれずとも重ねて除雪する日々 田中豊恵(新潟県)
 197 淋しさに迷い出ても浅草の街になじまず雨にたたずむ 北澤実夫(東京都)
 198 幸せはいつも心に鬼は外寒さも笑みで緩む初春 大橋絵代(千葉県)
 199 菊祭りつぼみの開く孫の鉢これから楽し姿重なり 大鳥居牧子(東京都)
 200 山肌の銀色雪色桜島静から動へ又噴き上る 濱崎祥子(鹿児島県)
 201 留守電の音なく点滅せるさまを灯りもつけず見ておりしはし 市毛信子(東京都)
 202 ばこさまと様付けにして蚕飼ふ母を助けて桑摘みしかな 高橋卓二(新潟県)
 203 極月や喜怒哀楽の一年を記録の日記思い出残す 栗原 清(埼玉県)
 204 又一年元気でいるよと又一年梅にウグイス人生ゆたか 辻 忠城(東京都)
 205 艶ありて大き玉なる椿の実手折らば唯にうれしかりける 三上益子(島根県)
 206 われ独りたらちねの手に育まれ今に至れり八十余年を 萬濃その子(神奈川県)

207 去年今年息子にもらったお年玉妻は
預金で私は旅行 新井 賢(埼玉県)
208 露天風呂手足伸ばせば永らへる雪舞
い降りて頭寒足暖
音喜多千津子(埼玉県)

209 几帳面まめせっかちの妻の居て惚け
る暇なしアバウト我は
村山徳英(埼玉県)

210 正月に孫は書き初め本気出し爺ちゃ
ん指導で見事に書いた
田中迪子(東京都)

211 横文字で書かれし絵馬もならびおり
年始にぎわう千本鳥居
岩崎令子(大阪府)

212 故郷は朴の木の花咲きみちて大願成
就のアンパンマン先生
西山悌三郎(高知県)

213 この自由神様からのプレゼント
細川光子(栃木県)

214 原発にダメよダメダメ再稼働
橋本世紀男(東京都)

215 脇役と思つた妻に引きずられ
守屋高雄(岩手県)

216 ああ極楽母も言うてた寒の風呂
小山恵美子(大阪府)

217 湯湯婆と読むおかしさの八十路婆
大久保アヤ子(東京都)

218 欲しかった自由を今は持て余す
三宅得三(新潟県)

219 てづくりの南京冬至までもたず
藤井碩子(山口県)

220 もう少し眺めていよう君の顔
高柳閑雲(愛知県)

藤沢健二(千葉県)

222 通じない電話に胸を撫で下ろす
丸山芳夫(東京都)

223 病院は元気で見舞い行くところ
石原 岳(群馬県)

224 腰二重むんずと伸ばし刃り見る
植松與悦(山形県)

225 孫がニコにニコにこと返すババ
小石澤英夫(東京都)

226 添加物満載で出すうまい味
嶋田征次(東京都)

227 煩惱を絶つ術もなく八十路坂
久本に地(岡山県)

228 幸せは曾孫が増えたお年玉
大江秋月(兵庫県)

229 気配りが過ぎて肝心間が抜ける
高松秋良(群馬県)

230 外遊びあいだをぬって医者通い
奥那子(大阪府)

231 灰たたき囲炉裏の餅は母の味
中嶋秀次郎(埼玉県)

232 曲つてる切手乱れている心
山口千鶴子(東京都)

233 この瞳奥に無限の未来ある
森 恒雄(愛知県)

234 モンゴルの小羊育ち土俵入り
近藤富夫(東京都)

235 半分は他人まかせで母介護
高橋久仁子(福岡県)

236 ダメモードダメ集团的自衛権
原 崇雄(埼玉県)

237 父の句を詠んでわびてる親不孝
鈴木義雄(福島県)

238 被災地もやはり自民が強かった
濱田イサオ(福岡県)

239 オリパラをめざし節酒の五年間
松尾健二(千葉県)

240 ゲーセンの音と光にすくむ爺
中林恵子(大阪府)

241 勤労に休みも取れず感謝の日
富高くにひろ(埼玉県)

242 縫い針の落ちた音する雪の朝
横山子観(新潟県)

243 母の日だけのチャホヤ老母は満ち足
りぬ
岡本邦子(福岡県)

244 誰よりも若く見えたい同期会
福地義雄(沖縄県)

245 齢プラス賀状マイナス去年今年
鏡たか子(山形県)

246 老いの日々早寝早起き二度昼寝
磯山陽吉(東京都)

247 無事過ぎた晦日の夕陽ありがとう
奥田音野(香川県)

248 二男一女宝の地図を持つている
竹村穂夫(大阪府)

249 人生のスコアボードにゼロ続く
野田明夢(新潟県)

250 昇給制あつてよさそう笑顔にも
山崎一嘉(愛媛県)

251 一日を大事にしたい思っただけ
松田義登(福岡県)

252 放射線浴びつつ今日も生きてゆく
坂詰 進(福島県)

253 ニューイヤー駅伝肴屠蘇の朝
後藤すえひろ(福岡県)

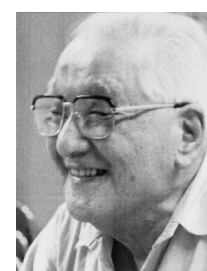
254 寒中のぬくもり求め日なた猫
大木和男(東京都)

255 鍋料理具のあるうちは迷い箸
青木日出男(群馬県)

256 老の手がいつかは止る日めくりの
村岡盛英(群馬県)

257 春を呼ぶ裸の群れは渦を巻く
西山知子(岡山県)

12月号の
心に残った作品
「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんの回答をお寄せ頂きありがとうございました。その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。



北澤実夫様

◎短歌部門
7 狭くとも団らんの声この部屋に溢れ
しことも昔はありき
北澤実夫(東京都)

・清貧の昭和の回想、温かさがある。久本に地(岡山県)・丸い食卓を囲み一家団らんの昭和の時代が懐かしい。子供達の声が聞こえてくるようだ。坂元正憲(東京都)・昔は9人家族で団らんの声、溢れていた。松尾正一(岩手県)・個々になつてしまったむなしさと昔を懐古している情景が心にしみました。市毛信子(東京都)・いづこも同じ。竹村穂夫(大阪府)

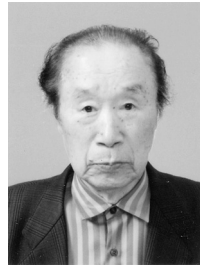
【自句自解】
八畳の間、真ん中にテーブルがあり、冬は炬燵になります。朝の陽ざしの中で、老々夫婦(夫90才、妻85才)はコーヒーを飲みながら「お早う」の言葉を必ず交わすことにします。
ここから二男、一女が育つてゆきまし

た。過した日々は懐かしく、部屋の隅々
にまで、想い出が残っています。柱には背
丈を計った子の薄くなった印の上に孫の
印が重なっています。今年も亦、除夜の
鐘を聞き、子達の家族ひとりひとり年
賀の挨拶電話を聞きました。

◎川柳部門

76 磨くより錆びるが早い脳の中

山崎一嘉(愛媛県)



山崎一嘉様

・仕舞の地謡を頼まれ無本で謡えるよ
う覚えようとするが忘れる方が早く苦
勞しています 小石澤英夫(東京都)・
加齢と共に感じることも多し 西條公雄
(埼玉県)・「磨く」と「錆びる」の対比
に実感を評しています 松尾健二(千
葉県)

【白句自解】

この度は、多くの方の選を頂き、誠に
ありがとうございます。

年を重ねると、昔のことは覚えてい
るのに現今のことは、覚えられなくなっ
て来るものです。つまり、脳がだんだん錆
びてくるのです。脳を常に磨き、脳が錆
びないように、トレーニングが必要と言
われています。

人生の登り坂に働いた脳は、これが人
生の下り坂になると、磨いても磨いても、
錆びるほうが早く、これを、句にまとめ
てみました。

◎俳句部門

95 そぞろ寒む背中合せの駅の椅子

堅田秀子(東京都)



堅田秀子様

・背中合わせにほっとする 炭崎博(滋
賀県)・駅の椅子等誰も気づかずにいる
ものをよく観察している 檜山とり子
(東京都)・背中合わせの他人同士が感
じていることは世の中の冷たさだろうか
古川正栄(千葉県)・経験あります。

駅の待合室の椅子にかけていると知って
いる人がいなく、電車が遅れているとき
びしく寒く感じました 杉村美保子
(岩手県)・駅のベンチは背中合せが多い。
ホームでは上り下りとそれぞれの人生
を背負いながらそ知らぬ顔も座っている。
そぞろ寒に哀愁が漂う 高崎登喜子
(東京都)・そぞろ寒の季語がよくきい
ています。刺激になります 平山千江
(岩手県)・「そぞろ寒む」に対する心
象が「背中合せの椅子」に見事に表出
されている 田野井一夫(栃木県)

【白句自解】

雨の多い島根から上京して四十数年
…年齢を重ねることに故里が無性に恋
しく、学生時代汽車通の小さな駅舎、
単線で行商の人の大きな荷物の中に座っ
て一日のはじまり何時もやさしい朝の顔、
板張りの長椅子背後から聞きなれた話
声……今一度ゆつくりと尋ねてみたい心
の故郷、潮風の冷たいこの季節思い出の
数々を辿っております。拙い句を選句し

て頂きましたありがとうございます。

《短歌》

30 戦いの時代に学びし昭和の子平和を願

いつ平成に老ゆ 寒川靖子(香川県)

・戦中はとても苦勞なさうなと思いま
す。九条を守り戦争の時代に後戻りし
て欲しくありませんね 関原幸子(東京
都)・吾も昭和の子。戦死の父にかわつ
て語部となる 早坂絃司(北海道)・私
は今年九十才になり私の歩んだ人生そ
のままです 岡子利明(兵庫県)・広島
に住んでいると平和の重さを感じられま
す 井上氣海(広島県)・同時代に生
まれ生きていく体験、同感 栗原清(埼
玉県)

《川柳》

43 九条を守らぬ首相は辞めてくれ

大江秋月(兵庫県)

・安倍暴走 森恒雄(愛知県)・平和憲
法を変え、昔の憲法の秘密保護戦争へ
つき進んでいる首相、代議士は不要で
す 菅井文男(新潟県)

《俳句》

147 人生の余白まだあり初曆

阿部徳夫(宮城県)

・八十才を過ぎたころより初曆を手に
するときいつもこうあつてほしいと願いま
す 堀木和子(大阪府)・余生を楽しん
で！ 日下温水(東京都)・老境に達し
てもまだ楽しみたい前向きの気持ちに賛
辞 上村元義(神奈川県)・届けられ
た新しいカレンダーを見て残された余白
を大切に使用したいと思った 岡村君枝
(茨城県)・新しいカレンダーを手にくれ
から又頑張ろうと思っている作者。それ

を余白と言ったところが良いと思いま
した 宮本幸子(埼玉県)・初曆をかけた
人生これからの心意気を感じられる
句 永井俊樹(兵庫県)

《他にも》

4 銃弾にペン一本でたち向ふ強気マ
ラに相応しい賞

黒澤正行(福島県)

6 杖に書きし墨書は昭和二十年百歳の
父の富士初登山

久保和友(滋賀県)

22 差別なき女子教育を訴たふるマラ
の受賞われも領く

石尾曠師朗(東京都)

126 奥入瀬の瀬音色付く秋の滝

片山茂子(埼玉県)

166 乗り継ぎの駅に端布の小座布団

岡村君枝(茨城県)

182 どちらかがいつかは一人秋深し

宮本幸子(埼玉県)

193 鎮魂の沖を見つめて石路咲きぬ

鈴木蝶次(宮城県)

195 束ねても解いても淋しい秋桜

中嶋清子(佐賀県)

201 健やかか他は望まず石路の花

村山徳英(埼玉県)

207 散りてなほその色褪せぬ冬紅葉

根田明(神奈川県)

212 ゆるしたき心も有りて梨をむく

浅海和代(東京都)

213 雪を掻く越の女のほてり顔

長谷川ただし(東京都)

247 身に入むやケイタイに残る「ありが
とう」

黒岩正子(埼玉県)

※今後もふるってご投稿をお願いいたし
ます！

第39回目の今回は、三ツ木宗一さまよりバトンを託された黒川道彦さま。同じ「福寿草」でも、日本とヨーロッパ、土地が違うと花言葉も異なってくるのだとか。悲しい思い出は消えないとしても、禍福はあざなえる縄の如し。転じた福や寿の喜びは一入です。

●お客様の「リレーエッセイ」

暮しの中の花

黒川道彦

(東京都・新宿区)

福寿草家族のごとくかたまれり

福田蓼汀

フクジュソウ、本来は三月頃に咲くが、正月の鉢植えにされるのは掘り上げたものを鉢上げし、ハウスで促成栽培されたものだ。福田蓼汀さんの句はその固まって植えられた様を家族団欒の姿に見立てて詠んだものだと思う。数多ある福寿草の句の中で一番好きな句だ。

花言葉は永久の幸福、思い出、幸福を招く、祝福等だ。キンポウゲ科の多年草で、学名はアドニス・アムールレンシスで、アムール川のアドニスで日本、朝鮮、中国東北部、シベリアに産する。ヨーロッパの花言葉は日本のそれとは逆で、悲しい思い出だ。学名のアドニスはギリシャ神話に由来する。美青年アドニスは二人の女神から愛されていたが、嫉妬からイノシシに化けた女神の牙に突かれて死んだ青年、アドニスから流れた赤い血から咲いた花に彼の名をつけたという。

福寿草って黄色いのに何で?と思われるかも知れないが、ヨーロッパには赤い福寿草があるそうだ。日本では秩父紅という品種があるが、それより赤い花だそうだ。早春から落葉樹林の南向きの山の斜面にいち早く芽を出し、あれよあれよと言う間に輝くような金色の花を開花する様は見事である。山の本々の芽が完全に展開する以前に茎葉を伸ばし、結実し終えて山が万緑になる前に充分に光合成で養分を貯え、来年の開花期迄さつさと休眠してしまう。優柔不断な私など福寿

草を見習うべきであるかと思う。

福寿草は私にとつての花言葉は、悲しい思い出である。昭和三十八年生まれ長男が、高校を卒業して専門学校を修了し、同業の所に修行に行った。約束の期間が明けて先方の社長と共に帰って来た。態度も自信に満ち、技術も一人前以上に成長した。母も家内も一回りも二回りも大きくなったと喜びに満ち溢れた眼で息子の立ち振る舞いを眺めていた。好事魔多しと言うがまさにそんな出来事に遭遇した。開店前の仕込中に突然息子の「あつ」という声とそばで働いていた社員の「おー」と言う声を聞いた。急いで駆け付けると「お父さんご免、こんなになっちゃった」と言いつて機械に押しつぶされた右手を見せた。口が渴き、頭がくらくらした。救急車で搬送するべく一九番に電話をかけ、商売の方は休めと指図しようと思った。「おやじ、商売はお客様さんが第一だ。休まないでくれ」と強く彼は言った。ドキッとした。初めて【おやじ】と言われた。

病院で創傷なら今の形成外科手術で接合可能だが、この怪我は大きな岩で押しつぶされたような怪我で接合不可能だと説明された。リハビリの苦痛にも耐え、退院後も左手でなんでも出来るように練習して不自由に打ち勝った。私の方がだらし無かった。あの時の事を夢に見るのだ。いつも必ず「お父さんご免……」という場面を見る。夢の中で嗚咽している所で眼が醒める。それが彼に愛する者が出来たら、何時も見ると悲しい夢を一切見なくなった。西洋の花言葉でなく、日本の福寿草の花言葉に心惹かれるのだ。



前回のアンケート

Q.好きな雑誌は何ですか？
その理由は？
紙幅の関係上、
すべてのお答えを
掲載できませんことを
お詫び申し上げます。

★短詩系

「俳句」

- ・特別企画・対談 有坂馨園(福島県)
- ・中広い俳句・俳句論を学ぶことが出来る
山崎吉晴(群馬県)
- ・宇多喜代子氏の「俳句と歩く」月々の文章
小島岳青(新潟県)
- ・季節を再認識と先生の評と意見
津田忠彦(岡山県)
- ・平成俳壇、推せん五句の選評がたれになります
三津木俊幸(千葉県)
- ・読者投稿欄、先達の俳句観
浜田はるみ(埼玉県)
- ・俳句の世界のいろいろを知る。句心が刺激され勉強になる
井原穂子(東京都)
- ・投稿もして、時々採ってもらいます
増本和子(大阪府)
- ・俳句一筋なところ
津布久信雄(東京都)



▲月刊「角川」
(角川学芸出版)

「俳句四季」

- ・グラビアが美しく、俳句とのコラボが絶妙
山田富朗(埼玉県)
- ・初刊の時から投稿、購読をしていた
田野井一夫(栃木県)

「俳句α」

- ・活字が大きく写真のきれいな俳句雑誌です
橋本世紀男(東京都)

「俳壇」

- ・「俳壇」表紙、内容が疲れない
鈴木清子(埼玉県)

「現代俳句」

- ・年に数句は拙句も登載してくれるし、特に巻頭言の直線曲線は読みごたえがある
居原田連星(大阪府)

「俳句界」

- ・若い方の俳句がとても楽しい
駒場京子(神奈川県)

「短歌」

- ・心ある高齢の歌人たちの正統的な詠いぶりに惹かれる
高橋卓二(新潟県)

「川柳マガジン」

- ・短歌雑誌、載せるべく評論を書いている
北岡 晃(兵庫県)
- ・日本全国各地の柳社の活躍ぶりは毎月の楽しみ
松田重信(埼玉県)
- ・投句するため
福地義雄(沖縄県)

ほか

- ・俳句の雑誌 それぞれの主宰のとられる句の違いがおもしろい
緑川禎男(埼玉県)
- ・「NHK俳句」「俳句」先輩作家の句を読む。句界の動向を知る
小山羊子(新潟県)

- ・「俳句α」と「NHK俳句」を毎回購入して勉強しています
井上静夫(栃木県)
- ・「俳壇」「俳句界」等々
渡邊碧海(静岡県)
- ・「俳句」「NHK俳句」「週刊金曜日」
福岡 悟(東京都)

★所属結社誌

- ・俳誌「俳句人」の雑誌「あらくさ集」
星 一子(神奈川県)
- ・自分の名前や自分の書いたものや作品のついている会員機関誌
梅澤鳳舞(埼玉県)
- ・趣味の俳句「玉梓」隔月だが自分の作品が掲載されている
勝田久美(大阪府)
- ・「紫」です。手前みそでごめんなさい
白戸麻奈(東京都)
- ・ライバルたちの俳句は刺激になり作句への気運が高まります
高崎登喜子(東京都)

★スポーツ

- ・「ベースボールマガジン」数十年間愛読(プロ野球関係の仕事をしてたこと)
坂元正憲(東京都)
- ・スポーツ雑誌 かつてはスポーツ大好き人間
大内泰子(東京都)
- ・「ランナーズ」マラソン専門誌で大会等ランニングに関して面白いから
新井 賢(埼玉県)

★暮らし・生活

- ・「サライ」
特集がしっかりしている。流行を追わない
奥那於子(大阪府)
- ・グルメ記事が愉しみ
奥田音野(香川県)

- ・どこかへ旅したくなる。押しつけがなく、心あそばせてくれる
鈴木岑夫(千葉県)
- ・男の雑誌です
関本 守(新潟県)
- ・自分の生活にあつているから
岩田 信(神奈川県)
- ・文学、音楽、美術その他、すべて私好みのジャンルで、写真などもきれいです。投稿欄もあつて、投稿するのが楽しい
萬濃その子(神奈川県)

「暮らしの手帖」

- ・全体的に大好きです。まず表紙が良いですね
福田和子(東京都)
- ・広告をとらないユニークさ
藤井碩子(山口県)
- ・衣・食・住、生活観が一味、良質で参考になります
中澤寿美(神奈川県)
- ・長年愛読しています。今すぐ、やがて役立つ記事があると思います
山崎鶴恵(鹿児島県)



▲月刊「サライ」
(小学館)



▲月刊「暮らしの手帖」
(暮らしの手帖社)

A Q U E S T I O N N A I R E

「オレンジページ」

- 旬の野菜を取り上げているので料理の巾が広がる 小澤円梨(静岡県)
- 料理が苦手なのでレシピを楽しみに作ったりします 濱崎祥子(鹿児島県)

ほか

- 旅とか料理の雑誌 天野輝子(東京都)
- 「クロワッサン」衣食住すべてそして人生全般に関しての情報が1冊にびっしりつまっています 阿部澄江(宮城県)

★文芸、教養

「文藝春秋」

- その時折りの気にかかることを載せてある 佐々木都(長野県)
- 内容が充実しており主張に偏りが少ない 藤沢健二(千葉県)
- 社会性に富む 森 俊彦(神奈川県)
- 新聞にはない深堀りがある 山本勝美(滋賀県)
- 塩野七生氏のエッセイ、勉強になりやすい 合田浩子(茨城県)
- 「葎の髄から」 古川正栄(千葉県)
- 易しい常識がよい 千代田俳徒(東京都)

- 多岐に渡る内容、しかも理解しやすい 田野倉訓郎(東京都)
- 教養人必読の書です 藤原昭三(滋賀県)
- まあ日本の良心と云えるでしょう 今井勝子(新潟県)
- 時事、文芸評論等、民意の醸成・指針となる 上村元義(神奈川県)
- 時事問題等特集ものに関心あり 田中 昶(鳥取県)
- 片寄らずジャンルが広範で常識的で、むずかしさがなく世の動きもよくとらえている 岩村 昇(神奈川県)
- 格調とタイムリー 松尾健二(千葉県)

- 三流週刊誌のような記事は書かない 黒澤正行(福島県)



▲月刊「文藝春秋」(文藝春秋)

「ラジオ深夜便」

- 蒲団の中でイヤホンで同じ世界。寺内 侷(埼玉県)
- ラジオ深夜便のエッセイ、「俳句」(角川)の字多、高野両氏の俳論。 齊藤安弘(神奈川県)
- 活字が大きく軽く読み易い。とっつき易い内容 三上益子(島根県)
- 老の暮し。明日へのことば 宇田川正雄(埼玉県)
- 五木寛之の「歌の旅人」を愛読しています。 永井俊樹(兵庫県)
- エッセイが楽しみで読んでいる。 村田吉雄(東京都)
- 時宜に合った内容が豊富です。 長野光康(神奈川県)

「世界」

- 政治の記事が充実している 植松興悦(山形県)
- 世界・日本の総合的に見る目 山田楽山(埼玉県)

ほか

- 文芸春秋(ほとんど毎月)新潮45(たまに) 河野静子(埼玉県)
- 文芸春秋 P H P 杉村美保子(岩手県)

★女性誌・教養

「家庭画報」

- 写真の色が素晴らしく楽しんでいきます 矢島多恵子(東京都)

- 月に一度行く美容院で読む、見る 山本直子(大阪府)
- 主婦として必要な事が内容濃く、写真もカラーで見れる。読んでも実益的に役に立ちます 大鳥居牧子(東京都)

- ブックアート、コンサート、シネマ等の情報を見て出かけるのを楽しみにしています 中山日出子(大阪府)
- 旬のきらめく言葉、写真の美しさ、対談の内容の面白さ 増田公代(東京都)

ほか

- 婦人画報 写真の美しさ気いつてます 山田幸代(兵庫県)
- 「婦人公論」「毎日が発見」「和楽」自分では手の届かない高級な世界を見られるから 松尾らん(東京都)
- 婦人之友社 「明日の友」亡妻の愛読書を引続き愛読中 野木宗信(奈良県)

★趣味

- 月刊「将棋世界」将棋界の動向が解り棋力向上の一助に。ボケ防止に「NHK俳句」と二兔を追っている 大橋恒次(新潟県)
- 毎月刊行される茶道関係の雑誌 古来変わらない製法で作られている地方地方の菓子の紹介記事が楽しみ 鈴木みえ(長野県)
- カメラ雑誌かな?入賞作品の評価が楽しみで勉強になります 小林七重(新潟県)

★情報誌

- 「旅の手帖」家においても日本国中旅ざんまいの毎日 阿部徳夫(宮城県)
- P H P 元気をくれる内容 杉本敬治(愛知県)

★週刊誌

「週刊文春」

- 「旅の本」未知の場所には夢、行った場所には思い出が 中林恵子(大阪府)
- 現況を捉えた的確な情報に裏付けされた鋭い現代批判 加用章勝(千葉県)
- 平松洋子の食のエッセイ、ファンになりました 稲葉民雄(千葉県)
- 「週刊文春」の「川柳のらりくらり」 「阿川佐和子のこの人に会いたい」 石原 岳(群馬県)

ほか

- 週刊新潮・週刊文春 若干片寄は感じますが問題の核心をついたユニークな編集 長谷川ただし(東京都)
- サンデー毎日の俳句、週刊文春の川柳、2冊は楽しみに毎週読んでいます 大久保アヤ子(東京都)
- 週刊新潮 桜井よしこさんのコラム 高柳閑雲(愛知県)
- 政治に興味がある為政治経済の時事裏話が好き 関子利明(兵庫県)
- パーマ屋さんで見える週刊誌 皇室の方々のご様子が中心 田中豊恵(新潟県)
- 「週刊現代」時宜を得た結果に注目!! 吉村充治(埼玉県)
- 「アエラ」現代社会の今が分かるから 浅野信廣(宮城県)
- 医院の待合室で肩がこらずに読める料理の本が好きです。 中田文子(大阪府)
- サンデー毎日 サンデー俳句王とミセス通信 北野耕兵(千葉県)
- 週刊朝日。時々心の暗黒面のドキュメントリー記事がある。 木下 精(大阪府)

★その他

友人が毎月送ってくれる中日新聞の小冊子 吉里ひとみ(東京都)
 ・芸術新潮。日本の総合的な芸術美術、文芸がよろしいです
 須澤重雄(長野県)

「散歩の達人」各地の散歩コースや宿、飲食店等、外出する時とても参考になります
 関原幸子(東京都)

「ながの農業と生活」誌
 大場茂明(長野県)
 ・筑摩書房の情報誌「ちくま」、新刊書籍発行の参考にする
 寒川靖子(香川県)

「ちくま」(筑摩書房)本の情報、世の中の流れが知られます
 湯浅芳郎(岡山県)

・信用金庫の春、夏、秋、冬号とか毎月発行信金だより。俳句、川柳、短歌もあり色々楽しみにしています
 小山恵美子(大阪府)

「北方文芸」(札幌)昭和四十年代からの月刊文芸誌は私のロマンです
 早坂絃司(北海道)

「世論」「WILL」を読んでいます
 浦橋克行(兵庫県)

「喜怒哀楽」肩のこらない気安さ
 青木ケン子(埼玉県)
 ・一番に「喜怒哀楽」関係のものをみます
 黒石正子(埼玉県)

「いきいき」私より若年の対象の本。
 「美智子様一枚の写真」日野原先生
 「生き方上手」「さくち体操」「ロマンチック百人一首」堀木和子(大阪府)

昔は明星で楽しみましたが今はもう花の本くらいかなあ。最近は美智子さまの本、羽生結弦のオリンピックの本
 佐伯セツ子(香川県)

時代劇の小雑誌と「週刊朝日」です。チャンバラが面白いですね
 大江秋月(兵庫県)

・通販誌 夢があり買わなくても見ていて楽しい
 長峰正晴(千葉県)
 ・「墨」最近の書情報を見るのしめ
 南喜美子(千葉県)

・NHK「今日の健康」自分の健康の為に読んでいます
 片山茂子(埼玉県)
 ・地元の温泉情報誌など
 井田由利子(宮城県)

「百味」世界各地の料理が紹介されている
 松嶋光秋(東京都)
 ・「淡交」裏千家の情報を見る。
 渡辺由美子(宮城県)

「週刊金曜日」反権力的なところがよいです
 原 崇雄(埼玉県)
 ・「新建築」毎月斬新な設計者に会えるから
 濱田イサオ(福岡県)

「オール读物」私生活の作家どうしの談話、うらばなし
 神 一男(静岡県)

「華音」年に一冊位ですが絵画・文学・写真対談など内容豊富
 田中美智子(埼玉県)
 ・MOM 日々のくらしに彩りを添えてもらえ
 大橋絵代(千葉県)

「青春と読書」臨場感あふるるインタビュー、対談描写にわくわくします
 中村康浩(福岡県)

「1010」という東京の銭湯の本、行って見たくなる
 大木和男(東京都)
 ・「歴史と旅」日本歴史の時代と人物、事件など多彩である
 青木日出男(群馬県)

「いきいき」人生をいきいきと楽しむ情報がつまっている
 村山徳英(埼玉県)

新潟ぶらり

★岩室温泉―開湯三百年北国街道の情緒

新潟市内の温泉。月岡温泉(弊誌二〇一四年八月号掲載)と同じく、新潟の奥座敷とよばれる。しかし月岡と異なるのは、岩室が開湯三百年の歴史をもつ温泉であることだ。月岡をはじめ、新潟の温泉は石油掘削で出た温泉等新しいものが多いが、岩室は慶長三年(一五九八)岩室村検地帳に「湯のこし」の地名があり、すでに湯の湧出があったと考えられている。越後の宮・弥彦神社にも近く、参拝の精進落としての地として、北国街道(天和朝廷が開き、上杉謙信が整備した)に位置する温泉地として、栄えてきた。いまでも街道沿いに旅館が連なり、古い温泉街の情緒がたどよう。岩室温泉開湯伝説として、次のような話が伝えられている。
 正徳三年(一七一三)の正月元日の夜から三夜、高島庄左衛門の夢枕に白髪の老翁が現れ「この温泉に浴すれば諸病が治る、汝すみやかに温泉を開発して衆生を救済すべし」と云われた。そのお告げ通りにこの地を探すと、一羽の傷ついた雁が泉流に浴して怪我を癒していた。「夢で見た老翁が話していた温泉はこれだ」と、この泉を開発した。

泉質はナトリウム・カリウム塩化物温泉で、効能はきりきざず・やけど等とのこと。雁の姿が重なる。

当温泉にはいくつかの旅館があるが、泊まらずとも湯を楽しめる施設もある。なかでも気軽なのは、新潟市岩室観光施設「いわむろや」。西蒲区の歴史、伝統文化、観光資源等の情報発信・提供を行っている「旅の総合案内所」である。この館内の足湯に、無料で入ることができる。

良寛さまで知られる国上山、弥彦山、多宝山、角田山に包まれている岩室。足湯につかりながら、結露したガラス窓から向こうの山々をゆつくり眺める。湯に浸かったところだけ、まっ赤になった。

雪の峰しづかに春ののぼりゆく

飯田龍太

同じ雪でも、年末の雪とはやっぱり色がちがう。なんとなく暖かい色に染まっていくながら。(菅真理子)



住/新潟市西蒲区岩室温泉96-1
 9時~19時(足湯は18時30分)まで
 第1水曜、第3水曜は休

詠み人のリレーエッセイ 『TsumUGU』好評発売中!

本誌「喜怒哀楽」誌上で、2007年2月号から2011年12月号までの5年間にわたり、「詠み人のリレーエッセイ」(P16参照)として紡いできた10名の俳人のエッセイ合計30篇が、『TsumUGU』として現在好評発売中。

世界で一番短い詩型の俳句は特別な人のもではなく、私たち日本人のDNAに組み込まれたもの。より、俳句が身近に感じられる1冊となっています。特典の小冊子は、普段あまり目に触れることのない著者たちの横顔と個性が彷彿とされる稀少品。この機会にぜひお求めください!

仕様: B6判 136ページ 2,000円(税・送料込)
著者: 中原道夫、池田澄子、高柳克弘、神野紗希、山西雅子、日原傳、岸本尚毅、森賀まり、高田正子、中西夕紀
申込み: お名前、ご住所、電話番号、ご希望冊数を明記のうえ、FAX、メール、郵便(またはお電話)でお送りください。(P16下部参照)



2015年の「喜怒哀楽」も よろしく願いいたします!

この度は、2015年分「喜怒哀楽」の送料をご入金くださり、誠にありがとうございます。当社を知っていただくための広報ツールとして始めた「喜怒哀楽」でしたが、応援くださり、楽しみにしてくださる方々のおかげで、今まで発行することができました。

そして、本年分より、送料をご負担いただく形となりましたが、多くの方にご賛同いただき、身に余るようなお言葉もたくさんいただきましたこと、改めて感謝いたします。

アンケートの返信はなくても、お読みくださっている方々の多さに驚きつつ、より多くの皆さまにご満足いただける紙面をつくりたい!という勇気を頂戴いたしました。

これを機会に、今まで投稿をためらっていた方もぜひご参加ください。最初は自信がないかもしれませんが、いったん始めれば、そして続けていけば、きっと前進します。他の方との比較ではなく、自分なりの一歩前進をともに楽しんでまいりましょう!

この「喜怒哀楽」を通して、人が本来持っている、生きる力を感じていただけるような、一歩でも半歩でも、お一人おひとりの成長が感じられるような、そして何よりも人のぬくもりが感じられる紙面をめざしたいと思っています。イキのいい、新陳代謝のいい「喜怒哀楽」を提供してまいりますので、これからも応援をよろしく願いいたします!!

オリジナルポストカード2種を好評発売中!

ご好評をいただいている当社オリジナルポストカード。同封のアンケート用紙にご希望の種類、セット数を明記のうえ、**必要金額分の切手を同封のうえ封書にてお申し込みください。**

- A 活版印刷(おめでとう:鯛・とつくり各3枚計6枚入り1000円)
- B 季節のポストカード(今回は「アネモネ」を同封8枚入り500円)



スタッフの一言

Q. 好きな雑誌は何ですか? その理由は?

※ スタッフが持っているのは今年にかける思い!!です。



実家は「週刊朝日」嫁ぎ先は「週刊文春」を取っている。幼い頃よりゴシップ、三面記事には自信あり!新聞の雑誌広告や電車の吊り広告も凝視。下世話さに磨きがかかっています。



昔は毎回決まった音楽雑誌とか、漫画とかを買っていましたが。今ではすっかり買わなくなりました……。でも、ネットの情報より紙の情報が良い!と思ってしまうのは、職業柄でしょうか……?



「LIFE-mag.」というインタビュー誌。読みでががあります!昔は父が「小学〇年生」を必ず買ってきてくれ、せっせと読んでいたなあ。「暮しの手帖」の藤城清治の影絵連載を母と読むのも楽しかった。



今、定期的を買っているのは「ブリザードフラワー教本」です。年間4回送られてきます。これは、生花をそのまま加工してアレンジするというお花の勉強の本です。子供の時は「科学と学習」や「小学〇年生」という毎月発売の本。付録が楽しみでした。



最近は買わなくなりました。前はファッション誌くらいしか。新潟と言えば komachi という情報誌があります。病院、飲食店、美容室等々、どこに行っても置いてあります。



美容院で読む「女性自身」「女性セブン」、歯医者さんの待合室で読む「週刊文春」の特にエッセイ「夜ふけのなわとび」「新宿赤マント」(連載終わってしまった)、会社で読む「理念と経営」。



本屋に行って目で追うのは園芸や野菜つくりの本が置いてあるコーナー。特に薔薇に関する本を手に取り見たりして買います。



10代前半▶学研の「学習・科学」「週刊マーガレット」。10代後半▶「週刊少年チャンピオン」、ファッション雑誌「適宜」。20-30代▶「ロッキング・オン」(渋谷陽一さんブログ見ます)、その後▶チラシや無料の情報誌を眺め、丁寧に置き場にもとず習慣が。



IDEAやプレーン、デザインの現場、コマース・フォトなど、デザインや広告関連の雑誌を定期的に購入していました。今現在は内容やレイアウトの勉強にもなるBRUTUSが好きです。建築関係の雑誌も素敵でよくジャケ買いするタイプです。



無病息災!賽ノ神でスルメを焼いて食べる3歳5ヶ月の結月です!



切実ということ

私が初めて音楽ソフト、わかりやすく言えば「アルバム」を買った媒体はカセットテープだった。今ならば自分が聞きたい一曲だけをほんの数円でダウンロードすればいいだけのことだが、三千元ほどする小さな筐体は、中学生になっただけの自分にとっては大きな買い物で、親に恐る恐る「買ってもよいか」と願ひ出たことをよく覚えていいる。幸いその時の親の返事はとても優しく、すぐに私に臨時の小遣いを握らせてくれた。嬉しかった。音楽が聴きたかった。自分の心に沁み込む音と詞を欲する年頃になっていたのだ。よく言われることだけれども、私はそのカセットをすりきれればかりに聴き込んだ。切実ということと思うとき、私はあのカセットテープのことを思い出す。

何も録音されていない「生テープ」というものがあつた。新聞の週間ラジオ欄をチェックして、週に一度の音楽番組を探し当てる。それは土日の午後にオンエアされるものが多かったと思う。ラジカセに生テープを差し込んで、赤い丸印のついた録音ボタンを押す準備をする。「今週の第〇位は・・・」というナレーションに合わせてボタンを押す。一曲丸ごと流してくれることなどほとんどない。せいぜい曲の「一番」が流れればいいほうで、そうして溜まっていく途切れ途切れの、番組司会者の声やときにはCMの音も混じってしまう音楽の断片を、私は自分の部屋で何度も何度も聴いた。

テレビの音楽番組も流行っていた時期だった。聴きたいと思

目黒哲朗

前回の里見佳保さまからバトンを受け取った目黒哲朗さま。「涼しくて、でもなつかしい歌をつくる方です」との里見さまの言葉どおり、読み終えた瞬間、ほぼ同じようなことをしていた身としては、その切実という感覚の懐かしさに、しばし感じ入っていました。

うミュージシャンが出演することがわかると、テレビのモノラルスピーカにラジカセを持って行って、曲が始まると同時に録音ボタンを押した。息を殺して、身体をテレビに押し当てるようにして録音した。そんなときに限って、家族が後ろで何のデリカシーも無く行き来したり、挙句の果てには咳やくしゃみなどをしたりするものだから、私は激怒して停止ボタンを押し、ラジカセを持って部屋を出ていったこともあつた。

生テープのケースには決まって、書き込みが自由にできるラベルがついていたから、私は録音した曲名を丁寧にボールペンで書いた。使い慣れないペンで書く中学生男子の字である。いくつも間違えた字を砂消しゴムで消し、また、白い紙を上から貼りつけて書き直したこともあつた。再生ボタンを押したままの状態でラジカセの「巻き戻し」ボタンを押すと、キユルキユルと音がした。不思議なもので、聴きたい曲の先頭で、パツとボタンを離すタイミングを自然と身に付けていった。今、思い返すと笑ってしまうばかりの少年時代の思い出の数々である。

「何度も何度もくり返し」「すりきれるほどに」「心に沁み込ませて」そんな切実な経験の数々を、あのラジカセと何本ものカセットテープから学んでいったように思う。私は今、どうやってそんな「切実」を実感すればいいのだろう。もう手にすることもないカセットテープを思い浮かべながら、考えることがある。

2015. 2. vol.78 (2015年2月10日発行/隔月発行)
 ●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション
 〒950-0801 新潟市東区津島屋7-29
 TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550
 株式会社ミュージズ・コーポレーション ☎ 0120-819-395
 e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com
 郵便局口座番号 00530-4-81370 口座名 株式会社ミュージズ・コーポレーション

編集後記

またお会いできてうれしいです。連日、振込用紙を確認しながら、あ〜この方も、あの方も!と胸が一杯になる日々。改めて、声を大にしてありがとうございます!と叫びたい気持ちです。青臭い言い方かもしれませんが、「喜怒哀楽」のベースには「愛」を掘りたいと思っています。お読みくださる方を大切にしたい気持ち、自分たちの仕事、郷土新潟を愛し、誇りを持つ気持ち。そして口幅たい言い方かもしれませんが、何につけ物事の基本はシンプルなもの。因果応報、愛を与えれば愛が、憎しみを与えれば憎しみが。与えていただいた愛に愛を持ってこれからの紙面でお返します。受け止めてください! (木戸敦子)